

<p>文学・哲学・言語</p>	<p>【代表的な研究テーマ】 □ 中国古典文学における「隠逸空間」の諸表現</p>
<p>key word</p>	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 漢詩・漢文 ■ 隠逸 ■ 閑適 ■ 士大夫 ■ 園林(庭園)・住居 ■ 白居易 	<p>中国古典文学の主要な担い手であった士大夫層(官僚知識人)にとって、「仕隠」——出仕するか、世俗に背を向けて生きるかの選択——はその人生における主要な命題でした。士大夫が担う文学そして哲学・文化は、「仕隠」の問題を繞って形成されてきたと言っても過言ではありません。本研究は、「仕隠」のうち「隠逸」を担う私的空間(園林(庭園)・居宅)に焦点を当て、これらを繞る作品に文学的アプローチを試みるものです。</p> <p>研究の対象を園林・居宅(時に山林・草堂・閑居など様々な呼称で呼ばれる)に定めたのは、具体的な「場」を設定することで、より包括的に、あるいは新しい切り口でもって文学の動きや文化形成の軌跡を捉えることが可能になると考えたためです。また、園林・居宅を題材とした作品を、文学研究の立場から取り上げることが、建築の一分野としての古典園林研究に対して、何らかの寄与する所があると考えています。</p> <p>例えば、中晩唐の「牛李の党争」における一方の領袖として名高い政治家李徳裕(787-849)に、東都洛陽近郊にある自身の別荘「平泉荘」を詠った以下のような作品があります。</p>
<p>二宮 美那子 Minako Ninomiya</p>	<p>初帰故郷陌、極望且徐輪。 初めて帰る 故郷の陌、極望 且く輪を徐ましむ。 (故郷の道にさしかかった頃、遠くを眺めて車をゆっくりと走らせる。)</p> <p>近野樵蒸至、平泉煙火新。 近野 樵蒸 至り、平泉 煙火 新たなり。 (眼前の野原にはたいまつ灯り、平泉には煮炊きの煙が立ちのぼる。)</p> <p>農夫饋鷄黍、漁子薦霜鱗。 農夫 鷄黍を饋り、漁子 霜鱗を薦む。 (農夫は鶏や黍のご馳走をふるまい、漁師は新鮮な魚を持ってくる。)</p> <p>惆悵懷楊僕、漸為閑外人。 惆悵たり楊僕の、閑外の人たるを漸づるを懷う。 (ここにいると、都から離れることを恥じたあの楊僕がいかにも哀れに思われることだ。)</p> <p>「初めて平泉に帰り龍門の南嶺を過ぎりて遙かに山居を望む 即事」</p>
<p>教育学部 教授</p>	<p>李徳裕はこの時、長年の左遷を経て東都・洛陽に赴任する途上にありました。状況はやや好転したとはいえなお不遇にある中、作品中には不遇感は一切現れず、ひたすら「故郷」に帰ってきた喜びが詠われています。尾聯にどれほどの屈折を読み取るかという問題はひとまず措き、作品世界では世俗の価値観が全く顧みられていない点が注目されます。平泉荘は、「官」の世界に背を向けた士大夫の精神を支え慰撫するもの、いわば擬似的「隠逸空間」として機能しているのです。</p> <p>冒頭で「仕隠」は一大命題である、と述べましたが、実際の所、士大夫たちは望んで「隠逸」に赴くわけではありません。政争に敗れたり、病にかかったり、何らかの不如意な状況の中で、やむを得ず「隠逸」のスタイルをとる、といった方が実際に近いでしょう。そうであるからこそ、「隠逸」を支える場を充実させることは、人生を支えるために必須だったのです。彼らが残した大量の文学作品は、そのことを証明しているかのようです。</p> <p>本研究では、これまで唐代、特に園林史・文学史において大きな存在である白居易を中心として、様々な作品を扱ってきました。今後は時代を魏晉南北朝へと遡り、園林や居宅がより抽象的な形で詠まれた作品を扱っていく予定です。</p>
<p>【プロフィール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●専門分野 中国古典文学 ●略歴 ・2008年 京都大学大学院 博士後期課程 単位取得退学 ・博士(文学/2011年) ・2011-2013年 日本学術振興会特別研究員(PD) ・2014年 滋賀大学教育学部 准教授 ・2020年 滋賀大学教育学部 教授 【主な社会的活動】 ●所属学会 ・日本中国学会 ・中唐文学会 ・京都大学中国文学会 【その他】 ●主な論文 ・「姚合における「小吏文学」—「武功県中作三十首」を中心に」『日本中国学会報』第六十二集、2010年10月 ・「唐代園林連作詩考—王維『輞川集』を源として」『中国文学報』八十一冊、2011年10月 ・「園林の「小空間」—白居易詩文を中心として」『日本中国学会報』第六十五集、2013年10月 	